九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Impact of Flow Cytometry Crossmatch B-Cell Positivity on Living Renal Transplantation

栗原, 啓

https://hdl.handle.net/2324/1398541

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏　　名：栗原　啓

論文題名：
Impact of Flow Cytometry Crossmatch B-Cell Positivity on Living Renal Transplantation
（生体腎移植におけるフローサイトメトリークロスマッチ B 細胞陽性症例の意義）

区　　分：甲

論　文　内　容　の　要　旨

背景：フローサイトメトリークロスマッチ（FCXM）T cell 陽性症例の腎移植成績に関してはこれまで様々な報告がなされている。これらの報告では FCXM T 陽性症例は移植予後が不良であることが示されてきた。近年は、免疫学的なリスクの高い移植において Rituximab･血漿交換･グロブリン療法により良好な成績が得られるとの報告もみられる。一方で B cell 陽性症例に関して一定の見解はないのが現状である。今回、生体腎移植における B cell 陽性の意義を明らかにするために、FCXM B cell 陽性群と陰性群における拒絶反応および生着率を比較検討した。
対象・方法： 2007 年 4 月から 2012 年 6 月までに実施した生体腎移植のうち解析可能であった 146 例を対象とし、B cell 陽性（BCXM（+）n=31）群と B cell 陰性（BCXM（-）n=115）群の 2 群に分けた。2 群間での生存率、生着率、拒絶反応を 3 期（0～3 ヶ月、3 ヶ月～1 年、1 年～2 年）に分けて比較した。拒絶反応に関係する危険因子を特定するためにステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。
結果：移植後 1 年までの生存、生着率は両群共に 100%であった。2 年以内の拒絶発症率は BCXM（-)で 16.8％であった。一方、BCXM（+)では 33.2％であったが、拒絶発症率は両群間に有意差は認めなかった（P=.201 移植後 2 年まで）。感染症発症率にも差は認めなかった。感作歴のみが危険因子となった。結論：BCXM(+)群は拒絶が多い傾向があったが、生存、生着率に影響はなかった。また本検討では拒絶反応に対する既存抗体の関与が示唆されたものの統計学的有意差は認められなかった。今後、FCXM B cell 陽性の臨床的意義をより明確にするため長期間の観察が必要である。